

共に未来を育てるために

進路指導の現場から

進路指導は偏差値より
生徒の適性を重視

——進路希望の生徒を指導する際に、一つの大きな指標として偏差値があると思います。それ以外にどのような指標を重視しているのでしょうか？

本校は総合高校で、卒業生の約6割が大学・短大に、約3割が専門学校に進学します。大学・短大

進学者のうち、推薦・AO入試での進学者が約7割と多く、センター利用入試、一般人試での進学者は約3割です。

進路指導の際に私が重視するのは、偏差値よりも生徒の適性です。本人がやりたいことを実現し、将来の職業につなげられるように支援するのが最大の目的です。本校では1、2年次から「産業社会と人間」の授業や課題研究が

ら、適性やライフプラン、生き方や職業を考えさせています。推薦・AO入試の希望者には自分だけで判断して安易に進路を決めてしまわないよう、事前に相談に来るように伝えています。

総合高校の生徒は
早期に進路を決めている

——総合高校の生徒の進路選択には、どのような傾向がありますか？

総合高校の場合、早い段階から進路を明確にする生徒が多いと感じています。毎年4月に進路希望調査を実施していますが、1年次から「大学ではこういったことを学びたい」「自分は大学ではなく、専門学校に進学したい」といった具体的な回答が多く見られます。3年次の4月には大学進学希望者の7割以上が第1志望、第2志望の大学を決めていて、その多くが実際に志望大に進学しています。

以前勤務していた普通高校では、3年次の4月でも大学名どころか、具体的な学部・学科系統も未定という生徒が見受けられましたが、この学校ではそういう生徒は極めて少ないですね。

ただ、普通高校の生徒も、以前より志望大をシビアに検討してい

ただきたいと思っています。

——近年、注目している入試方式はありますか？

英語4技能を課す入試方式です。本校でも海外に留学する生徒が増えており、各学年でGTECを受験させるなどして、英語力向上に取り組んでいます。海外の大学への進学を視野に入れる生徒も増えていきます。欧米だけでなくアジア圏の大学にも興味を持つようになるようです。中学時代から異文化交流に目を向け、海外体験プログラムに参加する生徒もいます。

最近進路重点校に限らず、進路に対する価値観が多様化していますし、広い視野を持つ保護者も増えています。こうした傾向は今後、さらに広がっていくのではないのでしょうか。

まとめ

高校生の進路に
対する価値観は
多様化している
社会で活躍する
卒業生の姿を
発信してほしい



東京都立晴海総合高校 相談部主任

森川雅彦

もりかわまさひこ ●教職歴34年。専門教科は地学。東京都の私立高校講師、都立高校教諭を経て、2011年より現職。20年以上進路指導に携わる。東京都高等学校進路指導協議会の役員を務める。

るのではないのでしょうか。今は難関大学に入学できれば、将来がある程度保証されていたような時代ではありません。生徒自身も、自分の力で未来を切り開かなければならないと切実に考えています。

だからこそ、偏差値ではなく、「自分のやりたいことを実現できるかどうか」を重視して、志望大を決めているように見えます。

——併願大の数が減ってきているという話も耳にします。

減っているでしょうね。20年前は10校も受験する生徒がいましたが、最近はいずれ4、5校程度です。えり好みをしなければ大学に入学できるという時代背景もあるのでしょう。以前はチャレンジ校を絞り、実力相応校、安全校を

多く受験する三角形型の併願パターンでしたが、最近はチャレンジ校を多く受験し、安全校の校数を絞る逆三角形型にシフトしているようです。

大学卒業後の姿を
高校側に発信してほしい

——高校の先生方は大学に関する情報をどのようなツールを使って入手しているのでしょうか？

受験情報誌のほか、大学基準協会や日本高等教育評価機構の評価を確認します。また、大学説明会に積極的に足を運ぶようにしています。大学関係者から説明を聞いたり、実際に進学した卒業生から話を聞いたりすることで、印象が変わることもありますから。

——進路指導の担当者として、大学側からもっと発信してもらいたい情報はありますか？

キャリア教育の具体的な内容ですね。総合高校ではキャリア系科目の授業、行事など様々な活動で、発表やレポートなど能動的な活動をしています。大学でもこのような丁寧な指導が行われているのか知りたいで



すね。「就職ガイダンスの実施やエントリーシートの指導をしている」といった話は耳にしますが、「今の世の中にはこういう人材が必要とされている。だから、私たちはこのような方法で、学生を育てている」といった具体的な発信が少ないように感じます。

——3つのポリシーがある中で、ディプロマポリシーが伝わってこないということでしょうか？

そうですね。伝わってくるのはアドミッションポリシーばかりです（笑）。私たちが本場に知りたいののは就職先の企業名ではなく、「大学が学生をどう育てて、社会に送り出しているか」です。高校から大学、社会へと進んでいくのは同じ一人の人間ですから、大学で活躍する学生の様子を母校の高校に伝え、企業でがんばっている卒業生の様子を社会に発信してい

高校訪問 ワンポイントアドバイス

相手高校のニーズに 合わせた情報発信を

学部の説明から、入試、就職の情報まで全てを伝えようとする方がいらっしゃいますが、知りたい情報は高校によって異なるはず。ある大学は事前に質問シートを送ってくれるので、知りたいことを返信しておく、それに対する回答や資料を持ってきてくれます。このような方法だと、相手方の高校に喜ばれ、関係性もよくなるのではないのでしょうか。



希望者は1年生の春休みの米国海外研修で、他国学生と一緒に、語学研修を受講できる。語学研修だけでなく、工場見学などのアクティビティもある。

一步先に行く大学に聞きました！



日本大学 生産工学部



日本大学副学長・生産工学部長

落合 実

おちあいみのる ●千葉県出身。1976年日本大学生産工学部卒。1978年日本大学大学院生産工学研究科博士前期課程土木工学専攻修了。専門は環境影響評価・環境政策、海岸工学、水工水理学。2010年海洋調査技術学会技術賞受賞。2014年より生産工学部長。

さまざまな海外の生産現場で
マネジメントができる技術者を育成

就業後数年での
海外赴任に対応

—どのようなグローバル人材
の育成をめざしていますか？—

本学部は日本で唯一の生産工学部です。工学の専門知識修得に加えて、経営やマネジメントの素養を身につけた「ビジネスエンジニア」の育成が目的です。3年生の必修科目として、早くから企業や官公庁と連携した生産実習（インターンシップ）を取り入れ、将来

働く姿をリアルにイメージできる
課程の構築を行ってきました。

しかし近年、卒業生は就業後数年たつと、マネジメントする立場で海外の生産現場へ赴任し始めています。そこで、さまざまな海外現場で活躍できる「グローバル・ビジネスエンジニア」の育成が必要となってきたのです。

—グローバル・ビジネスエンジニアの育成目標を教えてください。

海外で活躍するためには何が必

称「Glo-BE」です。

知識先行でなく
体験先行のプログラム

—Glo-BEの内容や特徴を教えてください。

Glo-BEは2つの正課科目と正課外教育からなり（次頁左上図）、正課科目は専任教員とベネッセグループの講師が共同で授業を行っています。

* Global Business Engineer Program の略

ル・ビジネスエンジニアリング（G

BE）です。主に、グローバル社会へ挑戦するためのマインドセットや協働的課題解決能力を育成します。PBL型演習で、ベネッセ・キャリアのノウハウを取り入れ、現実世界の課題に向き合い、グローバルな視野を身につけ、論理的交渉力や、チームで課題を解決していく力を磨きます。

正課科目の2つ目は「英語コミュニケーション演習」です。ベリリッツと連携した少人数トレーニングを通じて、英語への抵抗感をなくし、コミュニケーション力を育てます。これは海外赴任者向けのメソッドを取り入れたオリジ

ナルのプログラムです。

正課外教育は自宅学習の「英語インプット（eラーニング）」です。英語の学習を習慣化し、語彙力・リスニング力などを向上させます。

プログラムの開発にあたっては、知識先行でなく、まず経験して気づきを与えることを重視しました。G・BEでは、海外展開をしている企業に訪問のアポを取り、質問を考え、ヒアリングを行い、その内容をプレゼンテーションします。教員は必要な事前準備のアドバイスは行いますが、学生は自分たちだけで訪問し、成功体験も失敗体験も共有することで、気づ

きを得ます。授業を受けることに、

グローバル社会を理解し、チームで課題解決するおもしろさに気づけば、専門の学びへの意欲にもつながります。英語が苦手でも、体験を通して海外で働くという将来の姿を動機にすれば、苦手意識を乗り越えられると期待しています。

実際の海外体験としては、米国シアトルのELS（全米最大の留学生を受け入れる語学学校）で、希望者による海外研修を実施（写真）します。3年生向け海外インターンシップ実施も検討中です。

—なぜ選抜制にしたのですか？—

学科単位で人数枠を設けて、学科混成で活動することから、意識の高い学生を集めたかったのです。彼らが自分の所属する学科に戻ったとき、他の学生に良い影響を与えることも期待しています。

当初は、英語が苦手な理系学生が多い状況の中で50名の定員が充足できるか危ぶまれました。しかし、新入生へ「英語が苦手でもよい」と訴求すると、250名以上が応募。学科ごとに選抜を行い、結果的には51名の学生を学科の偏りなく選抜できました。

選考に漏れた学生には、Glo-BEのエッセンスを盛り込んだ「サマープログラム」を優先的に案内し、フォローを行っています。

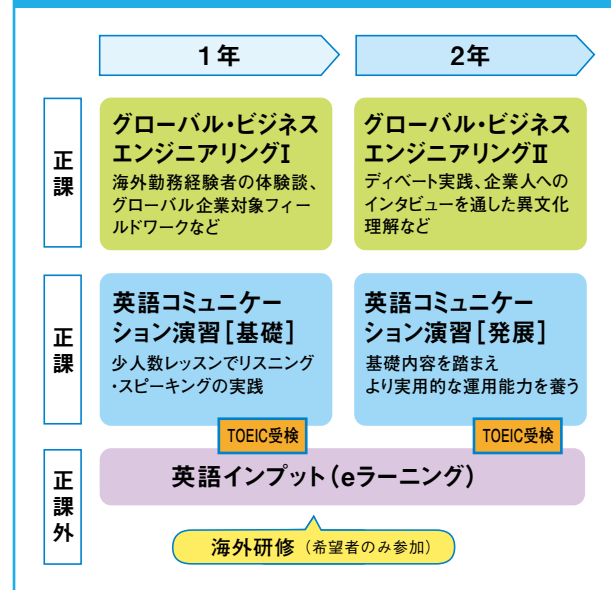
継続参加できる学生の
選抜方法が課題

—1年目を終えてみて、出た成果と課題を教えてください。

学習成果として、英語力の向上はTOEICの得点などから明らかで、英語の対話への抵抗感は低減してきています。学生アンケートからは、「物事の捉え方や視野が広がった（90%）」「自分の立場を客観的にみられるようになった（90%）」「授業中の活動に積極的になった（93%）」などの意見があり、学生は気付き、意欲を高め、そして、行動し始めています。一方で、2年生のプログラムには数名が継続しませんでした。別の道に踏み出した者もいますが、授業についていけない者もいました。今後は、エントリーシートの見直しなど、選抜方法の再検討を行って、継続的に参加できる学生を選抜できるよう工夫していきます。

学外の方と共にプログラムをつくったことで、生産実習など、本学部の持つ価値に改めて気づき、それがプログラムの開発にも生きました。今後も学外の意見に耳を傾けながら、日本で「唯一」の生産工学部の名にふさわしいユニークな教育を実践していきます。

Glo-BEプログラムの全体像



私の視点

日本の
高等教育の課題

大学の世界標準は
アメリカが基準

大学の世界ランキングが話題に上ることが増えました。ランキング上位の大学は国際競争力が高いと認められ、世界中から優秀な学生や教員を集めることができるからです。しかし、ランキングの中でも有名な*THEでは、日本の大学は500位以内に20校も入っていません。

その理由として、「英語を使って教育をしていないから」という声を耳にします。しかし、アメリカの大学が120校程度入っているのに対して、英語圏のイギリスの大学は、ドイツと同程度の50校程度しかランキングに入っていない。英語が原因ではないと考えています。

アメリカの大学が世界ランキングで優位なのは、大学を評価する

せるための基本的な考え方として私は「原点回帰」と「選択と集中」を打ち出しています。

本学の建学の理念は、「世界平和に貢献し、科学技術立国を担える人材育成」です。この理念に基づき、創立当初は全寮制や入試での面接の実施、厳しい退学基準など、グローバルスタンダードになう制度を数多く導入していたのです。しかし、時代と共にそれらの多くを廃止してきました。

真のグローバル大学をめざすために、懐古ではなく、創立の理念に立ち返る「原点回帰」に取り組みます。

まずは、アメリカのアクレディテーション取得を軸としたグローバル化に向けた大学改革プランを実行する予定です。他大学との協調も視野に入れながらカリキュラムや教育方法をアメリカの基準に合わせて、2020年にアメリカの認証評価機関に申請することを目標に準備を進めていきます。

また、学生が生活を通して学部や学年を超えた交流ができるしくみを、導入したいと考えています。昔のように全寮制の復活は難しいですが、例えば宿泊しながらの新入生研修会の拡充は、中退予防などにも効果があります。帰属意識の増進や、相互理解の向上が期待



私の
改革論

No.14

東海大学・学長

山田清志

「原点回帰」と「選択と集中」で
真のグローバル大学をめざす

アメリカのアクレディテーション取得を突破口に、大学改革プランを実行予定

取材・文／仲谷宏 撮影／柳田隆司

*THE：Times Higher Education

やまだ・きよし●1955年生まれ。1980年早稲田大学法学部卒。2003年東北大学大学院情報科学研究科人間社会情報科学専攻博士課程満期退学。1984年東海大学入職。東海大学ヨーロッパ学術センター、東海大学パシフィックセンター所長、ハワイ東海インターナショナルカレッジ学長などを歴任し2014年より現職。

基準がアメリカのアクレディテーションの基準、つまりアメリカンスタンダードが事実上の大学の世界基準だということの意味しています。つまり、大学のグローバル化には、アメリカのアクレディテーション取得が必要なのです。日本にも大学の認証制度がありますが、これは、アメリカの基準をお手本として日本に合うようにアレンジされたものです。しかし、先述の世界ランキングの結果を考えると、日本の基準では、まだ世界と戦えないのではないかと感じています。

日本の大学の基準を
世界基準に反映させる

とはいえ、アメリカンスタンダードも完璧ではありません。例えば、アメリカでは女子学生の5人に1人がキャンパス内で性犯罪

の被害に遭っています。これに対してオバマ大統領は、タスクフォースを編成し取り組んでいることです。日本では考えられないことです。また、日本の多くの大学の新卒就職率は90%以上ですが、アメリカをはじめ諸外国で新卒就職率90%以上の国はまずありません。

このように安全性や就職率は日本の大学の誇れる点ですが、現在のアメリカンスタンダードの基準には含まれてはいません。これがもし世界ランキングの基準となれば、上位に入る日本の大学が多く出てくるのではないのでしょうか。

第一段階として、アメリカの大学のアクレディテーションを取得し、第二段階として、同じ土俵で、日本の基準を世界基準に反映させていくことが、日本の大学の国際競争力を高めることになると信じています。

大学のディグニティを
高める努力も必要

グローバル大学をめざすには、施設を充実させることも重要です。欧米の大学の多くは、学生寮を備えています。日本でも最近ではリベラルアーツ教育における寮生活の果たす役割が見直されるよう

東海大学の
改革

自校の課題に
立ち向かう

建学時の理念・制度を
現代的に甦らせる

2014年の学長就任以来、本学をグローバル大学として発展さ

私の改革論

できると考えます。

47年継続している海洋調査研修船「望星丸」での海外研修航海では、毎年1000人が参加し、8人部屋での1ヶ月半の航海を通して学生は、タフネスを身に付けて帰ってきます。

入試については、かつては受験生全員に面接を課していました。私も助手時代に手伝っていたものです。現段階で全員面接を行うことは無理ですが、何らかの形で学力以外の要素を測定するような入試改革も検討しています。

進級制度に関しても、現在は最長16セメスターまで在籍できますが、以前は留年2回で退学という厳しいシステムを採用していました。世界基準に沿って見直していく必要性を感じています。

なお、本学では創立者の理念を受け継ぐコア科目として、全学生必修の「現代文明論」を展開しています。回帰すべき原点を見直す際の精神的な支えを育む科目として、今後も充実を図っていきます。

限られた資源を集中するための選択

今後到来する18歳人口の減少期には、かつてのような全方向を向いた大学運営は不可能です。原資

は増えないのですから、ある機能に集中して資源を投入するためには、別のものを犠牲にしなければなりません。ですから、私の掲げる「選択と集中」は、本来なら「集中するための選択」と言うべきものです。

資源を集中させるうえでは、年度末の予算消化が多くなりがちな単年度会計は大きなネックです。予算を弾力的に運用できるような方策を考えなくてはなりません。

奨学金の見直しも進めています。成績上位層に支給するのが一般的ですが、本来必要としている学生に支給されない可能性もあります。東海大学としての戦略的な人材育成に奨学金を活用するなど、思い切った改革も検討中です。

研究費も検討の余地があります。優れた研究に研究費を集中するには、研究に期待する教員と教育に期待する教員に分けることも視野に入れなければなりません。こうした選択を人事面で担保する制度も、2018年に向けて策定したいと考えています。

「原点回帰」と「選択と集中」は、繰り返し学内に発信し続けます。教職員が常に本学の原点とは何かを考え、それを実現するアイデアが次々と生まれるような、活性化した組織づくりが理想です。

トップの横顔に迫る

米国短大の学長として

ハワイ東海インターナショナルカレッジ(HTIC)の学長時代、英語もままならず悪戦苦闘する私に、ハワイ大学のケネス・モーティマー学長が掛けてくれた言葉が忘れられません。ハワイ大学を巨大タンカー、HTICを小舟に例え、「船のミッションはみな同じ。どんな船でも、『総員退避!』だけは船長が言うべきこと」と仰ったのです。最終判断は学長の職責だと気づき、やがてイエス・ノーもはっきり言えるようになりました。

のトップなら「with Gun」でいいが、大学の指導者の場合は「with Gun & Smile」だと言います。彼らは強力なリーダーシップのもとにトップダウン的な大学運営を行っていますが、それでもボトムアップ的なものを重視しており、それが「Smile」という表現になっているのだろうと得心しました。

追いかけた夢

父親は石炭の鉱山技師でした。小学生のころは、斜陽産業となっていた炭鉱を救うため、石炭に付加価値をつけられる化学者を夢見ていましたが、やがて日本の産業政策担当者を目指して文系に進みました。その後、入学した早稲田大学では政策そのものを変える政治家を多く輩出した「雄弁会」で活動しました。

リーダーシップ論

アメリカの高等教育のリーダーたちにリーダーシップについて聞くと、企業



HTICの卒業式で、アメリカでは「Charge」と呼ぶ学長スピーチを行う。



ハワイにあるHTICでは、学長といえども執務時の正装(?)はアロハシャツ。



HTIC学長時代、当時の大統領クリントン夫妻にホワイトハウスに招かれた。



「雄弁会」の仲間たちと。現神奈川県知事や新党改革党首の顔も見える。